

特集 基礎学力を問い直す

# 英語教育における基礎を 問い直す

森住 衛

(桜美林大学教授)

英語教育における基礎とは何かに関しては、本誌の前身『三省堂英語教育中学編』No. 42 (2000年10月)とNo. 44 (2001年4月)で取り上げた。前者では、コミュニケーションの基礎・基本を問い直し、後者では、英語教育の根本を論じた。あれから2年余りを経たが、この間に局面も変わった。とりわけ大きな移行は、昨年4月の新教育課程・学習指導要領の実施で、完全週5日制、英語「週3時間」、絶対評価の加味などが始まった。また、同7月には、文科省から「<英語が使える日本人>の育成のための戦略構想」が出され、中学卒業の英語学力の目安や教員研修などが具体的に発表された。さらに、同じ月に「指導要領枠外」の扱い容認の意向が発表された。そして、これらの動向と相まって、基礎学力の低下という問題が改めて浮上してきた。本稿はこの基礎学力の問い直しの任を負うわけだが、まず、基礎とは何かを概観する。その上で先の小論以後の新しい要素としての、週3時間、絶対評価、戦略構想を中心に、筆者の論がどのように適用されるかを論じていきたい。部分的に、先に挙げた筆者の論と重なるところがあるのはご容赦願いたい。

## 1. 基礎学力とは何か

「基礎」を「最重要」という意味でとらえるなら、英語教育の基礎は、言語材料では「語彙・文法」、言語活動では「考える・読む」、態度・気づきの点では「言語観」の3つである。

言語材料は一般に、音、文字、語彙、文法、表現の5つに分かれる。いずれも重要だが、特にどれか、となると、語彙と文法である。この2つがあれば、実際のコミュニケーションにも役立つし、異文化理解やメタ言語能力など認知的な言語学習にも耐えら

れる。実際の英語の使用でも、語彙の知識がなければどうしようもない。英語を聞けない、話せない、読めない、書けないのは、単語を知らないからである。また、文型や文法の知識がなければ、同じく4技能の発展的な学習が保証されない。しばしば、「日本人は文法はできるが使えない」と言われるが、「文法を知らないから使えない」のである。ところが、この語彙も文法の扱ひも薄くなっている。扱う語彙は1970年代から下降線をたどっている。文法も1980年代から軽視されてきた。これでは基礎学力が落ちて不思議ではない。

言語活動には5技能がある。「考える・聞く・話す・読む・書く」である。すべて大切であるが、このうち何が基礎となるか。現在の中学英語教育の環境では、すなわち、学校教育、EFL、「週3」、40人学級などの条件下では、「考える・読む」の2つである。「考える」を基礎としたのは、<ことば=思考・思想>だからである。言うまでもなく、<ことば=慣れ・無意識>でもある。日常生活においては、この傾向が強く出る場合もある。しかし、学校教育で扱うことばの学習は、意図的に「思考」や「思想」に傾斜すべきであろう。また、「読む」は、すべての基になる。大意がとれ、きちんと朗読できれば、「聞く・話す・書く」能力がついてくる。一斉授業で行う授業形態にも合っている。

基礎を論じる場合、もう1つ忘れてならないものがある。ことばの観点すなわち言語観である。言語観とは、ことばと人間やことばと社会との関係のとりえ方である。具体的にいうならば、「英語が話せること=国際人、ではない」、「Queen's EnglishやGeneral Americanの発音のみが正当な英語ではない」などの英語のとりえ方である。また、「少数民

族や先住民のことも大切にする」, 「ある国や地域に行ったら少なくともあいさつぐらいはその国や地域のことばを使う」など言語全般に関する見方である。言語観は、上記の言語材料に関する知識の「知る」や言語活動の技能の「使う」に対して、言語のあり方を「判断する」領域に関するものである。したがって、前者2つに比べて「正答」が出にくい。正答が出にくいが故に、学校教育で教師という人生の先輩の「援助」を受けて議論ができる。敢えて、学校の英語教育の基礎とする由縁である。

## 2. 「週3時間」での基礎学力— 1つの事例

中学の英語の授業時数は、1981年からの3年間ほどは「週3完全実施」であった。しかし、当時は選択の時間が比較的容易に取れた。そのため、なし崩し的に「週3+1」になって、これが昨年(2002年)度まで続いていた。しかし、今回はそうはいかない。週5日制完全実施のためである。他の科目も余裕がなくなったので、英語にまわってこない。加えて、言語材料はほとんど減っていない。当時と比べて生徒の意欲も落ちてきている。このために、実践的コミュニケーションのうち「聞く・話す」もままならないだけでなく、もっと基本的な学習活動、すなわち、最低限の文法の知識の習得すらもおぼつかなくなってきている。

このような状況で基礎学力を保証するにはどうしたらよいのだろうか。千葉県習志野市の小原弥生教諭の例を紹介しよう。研究授業も2度見せてもらったが、彼女は、週3の状況で生徒に保証してやれるのは、「自ら考えたことを話す」ための実践的コミュニケーション能力の基礎であるとして、このためにSix Stepsを考え出し、実行している。Six Stepsとは、①Reading Aloud, ②Buzz Reading, ③Look-up-and-Saying, ④One-Shot Reading, ⑤Shadowing, ⑥Recitingである。この活動を中学3年生に毎授業時間の20分くらいを割いて実施してきて、その成果もあげている。注目したいのは、目標としているのが単なる会話表現でないこと、そして、Reading関係の活動に焦点を当てたことである。この6つの中には、すでに部分的に英語の授業で実施されているものがあるが、これらを6つに

まとめたのが特長である。筆者は、「コミュニケーション・アプローチの3つの忘れもの」として、「朗読、模写、暗唱」を挙げているが、これらの復古的な活動こそ、かえって現代の実践的コミュニケーションの基礎になると信じている。小原氏の6つの中に、このうちの2つが入っている。行き詰まった窮余の策が本来に戻った例ではなかろうか。

## 3. 観点別評価・絶対評価の導入と基礎学力

観点別評価も絶対評価も望ましいことである。しかし、やっかいでもある。2つの長所が生かされるように、英語教育の基礎という点から観点別の4点をみてみよう。

関心・意欲・態度——この3つをまとめたとなえ方をしているが、実態は異なる。まず関心があり、やってみようかなという意欲が起り、それを態度で示す、という段階を踏む。そのため、例えば、関心があるが意欲がない、関心も意欲もあるが態度に出ない、あるいは表し方が下手であるなど、事例は個々に分かれる。本来の観点別では、文字通り、関心という観点、意欲という観点に分けなければならないが、あまり細かくすると動きがとれなくなる。これが、先に「望ましいがやっかいである」とした由縁である。現実的には、この3つの観点はまとめて扱うしかないだろう。さて、その際の基礎あるいは最も重要な部分は何かということになると、意欲である。関心は心の中で見えにくい。態度は、いろいろな形で出てくるので測りがたい。

表現する力——「話す」については、発音、語彙、文法、表現、内容に至るまで多岐にわたり、このどれもが大切であるが、最も重要なのは内容である。何を話題にどのように切り込むかである。もちろん、その前提となる語彙と語順などの文法も重要であるが、文法については、話しことばでは3単現の-(e)sや単複の呼応などは大目にやり過ごす。発音もそれらしき音が出ていればよしとする。この‘World Englishes’の時代にあまりに厳格にするのは、現実的にも理論的にも合わない。「書く」についても同様にその内容が最重要であるが、書きことばでの文法は重要である。文字の正確さやつづりも大切に違いないが、これは昨今のPCやメール、携

帯電話などの普及で、実際的にはあまり問題になってこない。

**理解する力**——「読む」は、観点別では、朗読と解釈に大別される。前者は、より多く表現する力に関するのだが、さらに個々の発音の正しさ、区切りやポーズの適切さ、感情移入などに下位区分の観点に分かれる。この中では、特に意味のまとまりで読めることが大切である。後者も、細部の正確な読みから大枠をとらえた概要の把握などいくつかの段階があるが、これまで見逃しがちで重要なのは大意の把握（探し読みや流し読み）である。「聞く」もこれからは「探し聞き」や「流し聞き」が基礎となろう。

**言語・文化の知識・理解**——言語に関しては、文法がわかっているかどうかにかき集約される。大切なのは、「わかっている」というのは「覚えている」とは異なることである。文化については、英語圏文化が重要なのは言うまでもないが、最近では異文化理解の点から英語圏以外の文化も広く取り上げられるようになった。全体として、権利に関すること、我が身を振り返ることの2つが重要な視点となる。

以上の観点別に、昨年度から、絶対評価という規準がついてきた。絶対評価とは「目標に準じた評価」であるが、この目標が、全体的な目標か、個人的な目標かで揺らいでいる。全体的な目標は、学習指導要領で示されていることである。文科省は一昨年来、「指導要領は最低線」と言っている。となると、指導要領で示されている内容がすべて基礎学力になる。ところが、学習指導要領のすべてを全員の生徒がマスターするなどは不可能に近い。そこで、目標を地域や学校、そして、最終的には生徒一人ひとりに定めることになる。これが本来の絶対評価のよい点でもあるのだが、それぞれ個別の規準を設けることになるので、全体の位置付けがわからなくなる。この結果、統一試験が必要ということになる。この現象が昨今現れてきた、公立中学では不安である、という声になっているのが現状である。

#### 4. 「戦略構想」による英検3級と基礎学力

冒頭の文科省の「戦略構想」では、「中学卒業段階で平均して英語検定3級程度の能力」という目

標設定がなされている。英検1次の問題は、会話表現が多く含まれるが、大筋としては、語彙力と文法力を問うているといえる。リスニングも然りである。問題は3部構成である。第1部が、対話を聞き、その最後の文の応答を選ぶ、第2部が、対話と質問を聞き、その答えを選ぶ、第3部が、英語と質問を聞き、その答えを選ぶ形式をとっている。すべて4肢選択である。ちなみに、2002年の問題の第1部と第3部の最初の問題は以下のとおりである。

[第1部]

A: Is John going with us to the soccer game?

B: No, he can't go.

A: Oh, really? Why not?

1. He didn't go. 2. He has a test. 3. It wasn't a game. 4. We can play soccer.

[第3部]

Paul went to see a movie on Saturday. He got to the theater at twelve o'clock. It was a popular movie, so he couldn't get a ticket for the one o'clock movie. He waited and saw the three o'clock movie.

Q. What time did Paul see the movie?

1. At 12:00. 2. At 1:00. 3. At 2:00. 4. At 3:00.

これが音声で出題されるので、「聞く」訓練が必要となる。しかし、このためにも「読む」を強化した方がよい。「読めても聞けない」ときどきはあがあるが、「読めなくて聞ける」ということは、EFLの場合には皆無に近いからである。そして、このリスニングの問題も、やはり、語彙と文法の力が重要といえないだろうか。第1部はH. E. Palmerの定型会話さえ想起させるほどに、文法力が試されている。第3部は、最後のHe waited and saw the three o'clock movie. がキーである。文法もさることながら、総じて言えば、語彙の問題となる。第2部の例は割愛したが、第3部と同じ議論が当てはまる。

以上、「週3」、観点別・絶対評価、目標の英検3級に関係させて英語教育の基礎を問い直してきたが、結論は、中学校の英語教育では「考える・読む」活動は保証したい、このために語彙と文法力を付けさせたい、そして家庭教育や社会教育では手薄になる言語観をしっかりとさせたい、となる。